PBeM『VOiCE』第１回リアクション
01-A　未知への扉

●星と魔女に願いを

子どもたちはもうそろそろベッドに入る時間帯。

星だけが静かに、その少女を見守っていた。

長いふたつの三つ編みの少女が、周りをうかがいながら、そっとそこへやってくる。

きょろきょろとあたりを見回して、誰もいないことを確認すると、さっとその場にしゃがみこんだ。

彼女を知る人が見たら、いつになく不安げな表情を浮かべているのを、いぶかしんだことだろう。

「……ううん、魔女が言ってたじゃん。きっと、必ず……」

●古くからあるモノ

他の街から「医療都市」とも呼ばれている、ふたつの丘。

その中心地である総合病院から見て南側に位置する「学校」から、歩いて五分もかからない場所に、その「古代遺跡」は存在する。

大きさは、小さな一戸建て程度だが、地下にも埋まっている部分があるかもしれず、実際のところはよく分かっていない。

遠くから見れば、薄汚れた何かの建物の一部のように見える。表面は植物や泥に覆われ、春になると白や黄色の花がところどころに咲くが、それ以外に特に目を引くようなものはない。出入り口は蔦(つた)で覆われているが、子どもや動物であれば、すんなり出入りできそうだ。扉らしきものは壊れており、外から中を覗くことはできる。暗くひっそりとして、生き物のいる気配はない。

毎日、登下校する子どもたちの賑やかな声を聞きながら、それは何を思っているのだろうか。

誰もが「昔からあるね」と語り、「でも、それがどうかした？」と返す。

クリス・グランヤードの兄たちもそうだ。

「古代遺跡？　ああ、そんな名前だったっけね」

ティム・グランヤードは人工紅茶を片手に、どこか懐かしそうな顔をして答えた。

「兄さんたちは、何か知っている？」

「何かって……何を？」

バース・グランヤードは末弟の問いかけに、不思議そうに首をかしげた。

子どもの頃、ふと不思議に思い、だがやがては忘れていく。

使い道としては、肝試しがせいぜいだ。

取るに足らない、思い出にもならないモノ。

「古代遺跡」と呼ばれるそれは、その程度の存在だった。

●少女の計画、少年たちの計画

担任であるキルシ・サロコスキが入院してから、もうすぐ一ヶ月。

クラスの空気はすっかり賑やかさを取り戻している。

社会科見学も終わり、何人かの少女たちはお見舞い計画や、バレンタインに向けて浮き足立ってくる頃合いだ。にわかに「おまじない」が流行りだし、淡い恋を胸に秘めた少女たちは、その準備に余念がない。

冬の優しい日差しがたっぷり降り注ぐ教室は、昼休みの喧騒に満ちていた。

「え、ほんとに？　チョコくれるなら行くぜ」

そう安請け合いしたのはルーチェ・ナーゾ。

女子たちからは「HENTAI」の名で呼ばれる少年だ。

あと十年もすれば、いわゆる「いい男」になるであろう素質に満ちてはいるのだが――いかんせん、「中身」が残念すぎた。

「あ、それとさ。遺跡に一緒に行ってやるから、お前のおっぱい触らせて。すげーじゃんお前、ミズキといい勝負でき、」

笑顔のまま、無言でジェシー・ジョーンズはルーチェの脳天へ、華麗にかかと落としを見舞わせた。

周りにいた女子生徒たちは、祝福の拍手をジェシーへ贈る。

ぷるんと揺れる、ジェシーの胸を優しく見守りながら、ゆっくりとルーチェはその場に崩れ落ちていくのだった。

加藤守佳(すすむ)とジズ・フィロソフィアは、教室の片隅で、とある「計画」を練っていた。

「……つまりさ、今まで誰もちゃんと調べようとしてなかったと思うんだ。だから、誰も知らないんだよ」

「うん、いい線いってると思うな。これまでの人たちが不甲斐(ふがい)なかったんだ」

彼らは頷(うなず)き合う。基本的な方針はこれで決まったも同然だ。あとは、実行するだけだが、その前にきちんと準備しなければ、不甲斐ない先人たちと同じになってしまう。

「眼鏡同士で、何の話？」

不意に、ビス・エバンズが二人の会話に入り込んできた。

「眼鏡同士って……何だよ、それ」

ジズが不機嫌そうに言い返す。
「眼鏡ってなんか頭良さそうに見えていいじゃないか。で、守佳とジズは何をしてるんだい?」
ビスは空いていた椅子を持ってきて、二人の横へさっと座った。ジズは肩をすくめ、守佳に話すよう促した。
「きみも、古代遺跡のことは知ってるだろ?」
守佳が問うと、ビスは頷いた。
「あれだろ、学校近くの……よく分からないやつ」
「そう。……ボクたちは、あの古代遺跡に挑もうと思うんだ」
ジズが真剣な眼差しでそう告げた。明るい緑の目が、真剣さと燃える好奇心とで、ひときわ明るく輝いて見えた。それを聞いたビスは思わず身を乗り出すと、興奮を隠し切れない面持ちになって言った。
「最高じゃないか!　もちろん、俺も行くぜ」
「ああ、ボクたちで遺跡の謎を明かしてみせよう」
「そのためにもちゃんと準備をしないとね」
少年たちは頷き合い、「計画」について再び話し合い始めた。

その様子を、ある少年が眺めていた。
「ふん、何かあるわけ、ないじゃないか」
そうひとりごちると、図書室で借りてきた本に目を落とした。眠そうに目をこすりながらも、ページを繰(く)っていく。
「ハーイ、クリス。お昼休みまでお勉強?」
少年――クリス・グランヤードの、眼帯で半分閉ざされた視界に、ぷるぷるんと揺れるものがふたつ。
「邪魔。その揺れるの、なんとかならないのか?」
「ユーもかかと落としを食らいたいお年頃なのね。グッバイ、クリス。あなた、いいオトモダチだったわ」
「……すみませんでした」
「どこかのHENTAIと違って、クリスってとってもイイヒトね!
ところで檻に行ってちょうだい。話があるの」
「それを言うなら、折り入って。遺跡ならお断り。チョコもね」
「何よ、もう!」
ぷるんと、ジェシーの胸が憤りで揺れた時、昼休みの終了を告げるチャイムが鳴った。

●「反動形成ってやつだね」「そうとも言うかも」

放課後の図書室は、存外賑(にぎ)やかなものだ。宿題のための調べ物をする者もいるし、本を借りにくるついでに司書の先生とのおしゃべりを楽しむ者もいる。
「古代遺跡に挑むっていうのに、まずは調べ物からかい?
探検家さんは、ずいぶん悠長なんだね」
クリスは、図書室で本を探している守佳を見るなり、そう言った。
守佳の手は、書籍データ検索用コンピュータの前で止まる。
「いきなりなんだよ」
「別に。言葉の通りだよ」
「……きみには関係ないだろ。そっちこそ、授業中いっつも眠そうで、今日だって先生にも叱られたのに、のんきに図書室で遊んでていいの?」
冷たく言い返すと、守佳はクリスを無視して、そのまま検索作業へ戻った。
検索キーワードは、「探検　方法」「ふたつの丘の遺跡」「調べ方」――思いつく限りにキーワードを入力しては、結果に目を通し、チェックする。
隣に立つクリスが気になるものの、こういう時は気にしたら負けなんだ、と自分に言い聞かせながら。
「ふん、きみは調べ物もろくにできないんだな」
「さっきから何なんだよ」
険悪な雰囲気を察したのか、近くで本を読んでいたクラスメートのシュリー・ジルカが二人から遠ざかるように、席を移動していく。
クリスは無表情のまま、守佳の目の前に自分のタブレットを突きつけた。その画面には、おそらく相当の時間をかけて調べたのだろう、大量のデータが整理されて並んでいた。
「ボクなら、この程度のことくらい、さっとできるけどね」
守佳は、タブレットとクリスを、交互にまじまじと見つめた。

●彼女の流儀

待ちに待った放課後。日は傾きつつあるが、子どもたちの遊ぶ声はまだ止まない。
エルシリア・ソラは家から持参したブラシ、おこづかいを工面して買った軍手やゴミ袋を持って、そこを訪れた。
見上げれば、空には一条の雲。すっと、気象衛星が流れ星のように横切っていく。
エルシリアもまた、「古代遺跡」に挑もうとする一人だった。内部を探ろうとする者たちとは異なるアプローチで、彼女もまた謎に立ち向かおうと決めたのだ。
まず軍手をはめた。指先がだいぶ余るが、作業にはそれほど支障はないだろう。
まず、「古代遺跡」の「汚れ具合」を確認する。植物は表面を覆っているものの、冬という季節柄、枯れているものも多い。これなら、エルシリアの手でも簡単に取り除ける。泥も、最近雨が降っていないので、表面が乾燥している。少し力を入れれば、軍手をはめた子どもの手でも簡単に剥(は)がせるようだ。
「……よし!」
自分自身を鼓舞するように、深く頷いて、エルシリアは

清掃作業に取りかかった。

彼女は、こう考えたのだ。

植物や泥をきれいに取り除けば、「古代遺跡」の正確な形状が分かるのではないか、と。本で見た大昔の遺跡発掘も、丹念に表面の土を取り除き、少しずつ掘っていくという。

形状が分かれば、そこから類似のものを探ったり、あるいは「古代遺跡」の独自性を調べることもできるだろう。

そのためには、まず邪魔な植物を取り除くことから始めた方が良さそうだ。

エルシリアはゴミ袋を広げると、入り口と思しき辺りから、枯れた蔦や葉をちぎってはゴミ袋に詰め込んでいく。茎や根についていた土も、ぼろぼろと剥がれ落ちていき、一石二鳥のようだ。植物がなくなると、やはりこれは人工物なのだという印象が強くなる。外壁はおそらくなめらかな平面だったのだろう。全部取り除けば、材質も自ずと分かるに違いない。

「あらあら、何をしているの?」

額の汗を軍手でぬぐうエルシリアに、不意に声がかけられた。

「あらあらまあまあ、どうしたの?　学校のボランティア行事かしら?」

にこにこと笑顔で、見知らぬ老婦人が話しかけてきた。白髪を品よく結い上げ、温かそうなコートに身を包んでいる。

「え、えーっと」

「あ、ごめんなさいね。わたくし、オーガスタというの。オーガスタ・ジェフリーズ。あなたは?」

「えっと、わたしはエルシリアです。エルシリア・ソラ」

エルシリアは記憶を必死に探ったが、オーガスタと名乗る老婦人に該当する知合いはいない。

「偉いわねぇ、街のお掃除だなんて!　ここも蔦が生えっぱなしでしょう、確かにちょっと見苦しいものね。春にお花が咲くのは素敵なんだけど」

「は、はあ……」

「それにしても、夕方まで頑張るのもいいけれど、日が暮れないうちにお家へ帰るんですよ?　いいわね、エルシリアちゃん。おばあさんとの約束よ」

「は、はい。分かりました」

なんとなく気圧(けお)されて、何度も頷いてしまう。「古代遺跡」を調査してるんです、なんて言おうものなら、叱られてしまうかもと思うと、何も言えなくなってしまった。オーガスタは、にこにこしながらゆっくりと歩いていった。その姿が見えなくなる頃、ようやくエルシリアはほっと息を吐いた。

「あれ、エルシリアじゃない!　何してるの?」

今度はクラスメートの声がして、エルシリアは振り向いた。

そこには同じクラスの面々が意気揚々と立っていた。

●探検部、爆誕

エルシリアが、クラスメートと思わぬ放課後の再会を果たす、一時間ほど前のことだ。

校門に集合した子どもたちが、互いの準備を確認し合っていた。

「確か、入り口みたいなところの近くに、木があったはずだ。そこにロープをつないで、命綱にしよう」

そう提案したのはジズだ。万が一に備えて、慎重に行動した方がいいと、彼は考えた。未知へ挑むということは、不用意に危険を弄(もてあそ)ぶということでは決してないのだから。

「ボクは、地図を作れるようにアプリをインストールしてきたよ。あと、これは提案なんだけど……一人で行動するのはやめた方がいいと思うんだ。何があるか分からないし、みんなで行動した方が、地図を作るのもスムーズだし」

「うん、いいんじゃないか」

ビスも元気よく頷いた。

「もし中で分かれ道があったら、チームに分けて行動すれば危なくないしね。帰りの集合時間から二時間経っても帰ってこない人がいたら、その時は先生でも誰でもいいから、大人の人を呼んでこよう」

「遺跡を調べてたら、迷子になっちゃったぁって、言ってもいいの?」

ジェシーが連れてきたクロワ・バティーニュが尋ねる。キルシ先生のお見舞いに持っていく映像を撮影できると言われて、ついてきたようだ。守佳はしばらく考えて、それも仕方ないだろう、と答えた。

「叱られるだろうけど、嘘をつくのはよくないよ」

「……くだらない」

吐き捨てるように、ぼそりとニアシュタイナー・シュトライヒリングが呟(つぶや)く。彼女もまた、ジェシーに連れてこられた一人だ。

「なんだよー貧乳ー。超ノリ悪いなお前」

ルーチェ・ナーゾが、ニアシュタイナーの胸元を指さしながら言う。

「おっぱいが小さいやつは、心が狭いなぁ。なあ、ビス!」

「え?　いやあ、俺にはわかんないなぁ」

「そっかー。まあお前もオトナのオトコになれば分か、」

ジェシーの正拳突きが、正確かつ理想的な角度でルーチェの鳩尾(みぞおち)を鋭く突いた。

「しかしまあ、なんか人が増えたね」

「ねー」

「なー」

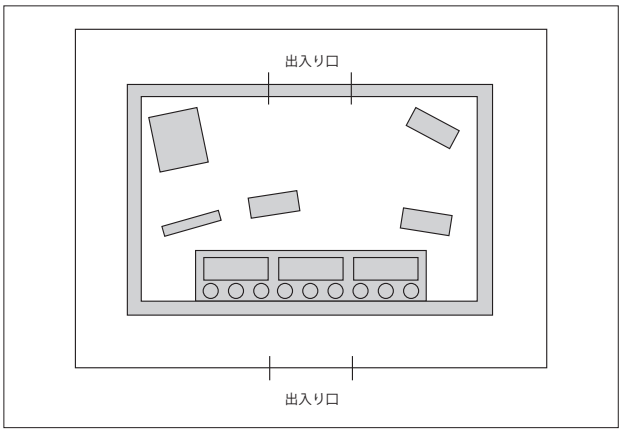
女子一同がぱちぱちと拍手し、男子一同は思わぬ大所

帯っぷりに顔を見合わせる中、ジェシーは皆(ルーチェ除く)に向き直った。
「ヒトリでも探検は楽しいわ。でも、ミンナとならもっと楽しい!」
　ジェシーは高らかに宣言する。
「ワタシ、ジェシー・ジョーンズはここに探検部の設立を宣言します!」
　あっけにとられるクラスメートたちを満足気に見やりながら、ジェシーは続けた。
「ここにいるメンバーひとりひとりが、探検部の精鋭であることを忘れずに!　今日来れなかったジャンゴの分まで、必ず生きて戻るのよ!」
　彼女が発言するたび、皆の視点は顔よりさらに下の、そこに集まるわけで。
「ジェシーはすごいねぇ」
　クロワが皆の気持ち(主に体の一部分について)を無邪気に代弁したのだった。ぷるん。ぷるぷるん。

　その後、道中では探検部の名称を何にするかという熱い討議が繰り広げられ、歩いて五分弱の「古代遺跡」にたどり着くまで、一時間近くかかった。
　ほぼなし崩しも同然に、「なんだかんだ言って、普通なのが一番いいんじゃないのか」という結論に至り、ここに「探検部」が誕生したのである。

●遺跡の中へ

　エルシリアが蔦を引き剥がしてくれていたおかげで、探検部のメンバーは出入り口らしき箇所からすんなりと内部へ入ることができた。
　ニアシュタイナーは「勝手にやってくれ」と中を覗き込んだだけで、途中で帰ってしまったが。
　ドアだったのだろうか、半分が折れるようにしてできた空間に、子どもたちは身を滑り込ませていく。
「なんだろうね、このドアみたいなの。金属っぽいけど」
「怪我(けが)しないよう気をつけて」
　声を掛け合いながら、ジズが結びつけた命綱と、各自が持ち寄った懐中電灯などの灯りを頼りに、探検部一同はゆっくりと遺跡の内部へ進んでいく。
　障害物らしきものは特になく、また分かれ道があるわけでもなかった。入り口から入ってすぐ、道は左右二つに分かれていた。二手に分かれて進んでみたところ、ぐるっと回って再会してしまったのだ。
　どうやら、「古代遺跡」中央に壁に囲われた広い空間があるだけで、それ以外には今のところ何もないようだった。



「……想像してたのと、ちょっと、いや、かなり違うかも」
　ジズが思わず口に出した言葉は、おそらくその場にいた全員が胸に抱いたことだろう。
　本や、「遺跡」という言葉からイメージする風景よりも、そこはあまりにも「現代的」すぎた――もちろん、彼らが普段から見知っている光景に比べれば、はるかに古い印象はあるのだが。
　壁や天井は、間違いなく人工物だった。木や土などではなく、おそらく何らかの強化金属なのだろう。外から入り込んだと思しき土埃(つちぼこり)やら汚れはあるものの、材質そのものには傷も錆(さ)びもなかった。
　恐る恐る、守佳が壁を叩いてみると、堅い音が響いた。
　壁に光を当ててみると、ドアのようなものがある。これもまた、入り口同様にへし折れており、通れるようになっていた。ただ入り口と違い、おそらく人為的に力が加えられたのだろう。
「入って、みる?」
　そう尋ねる守佳に、ビスが頷いた。
「行くしかないだろ」
「イエス、トレジャーハンターの血がここに何かあるって、ワタシに告げているわ」
　ジェシーもまた同意する。
「まず、俺たちが行ってみる。みんなはここで待っていてくれ」
　そう言って、ビスとジェシーが中に入っていく。
「何なんだろう、ここ……」
「部屋……?」
　二人は懐中電灯を手に、それぞれ周りを見回す。
　灯りの中に浮き上がるのは、壁に埋め込まれているらしい機器類と、なめらかな平面で錆びひとつない壁。床には、よく分からない機械や、金属片が転がっていた。機器類には、いまどき珍しいキーボード形のインターフェースがついている。
「ねえ、これって……!」

不意に、ジェシーが不安そうな声を上げた。彼女が指さす先には、茶褐色のシミのようなものがついた古い布切れが落ちていた。

ビスが思わず息を呑む。

「これって、まさか……ううん、やっぱり……」

「……血？」

傷口でもぬぐったのだろうか、捨て置かれたその布は茶褐色の汚れがべったりと付いていた。布自体は古いものらしく、すっかりボロボロになっている。

「ワタシたち以外に、誰かがここに入ったのかしら？」

「それにしちゃ、ずいぶん古い布だぜ」

「どうしたの？　大丈夫？」

扉の向こうから、守佳とジズが呼びかける。

「あ、ああ……」

やっとの思いで返事をすると、ビスはジェシーの手を引き、部屋から出た。

「中はどうなってた？」

「それが……」

「うん……」

ビスとジェシーは顔を見合わせる。ジェシーは、声が震えないように、精一杯の気力で皆に言った。

「とりあえず、ここは一度、外へ出ましょう。暗いから、見間違えたのかもしれないし……」

「え、何を？」

ルーチェが不思議そうに聞き返す。

「いや、出てから話すよ。もう外も暗くなっちゃうぜ」

ビスがさり気ない様子を装って、皆を促した。

「うーん、それもそうだね。この様子なら、出入りする分には問題なさそうだし」

「次はもうちょっと灯りを持ってこないといけないね」

「あんまり上手く撮れなかったなぁ……」

「大丈夫か、ジェシー？　怖かっただろ？　おっぱい揉んでや、」

「地獄へ落ちろ HENTAI」

こうして、探検部最初の探検は終わった。

●双葉の思い

「だめ！」

次の日も、「古代遺跡」で雑草を相手に格闘していたエルシリアは、突然誰かに突き飛ばされた。入り口周りの植物はあらかた取り除いたので、今度は地面を、と思ってしゃがんだ矢先のことだった。

たまらず体勢をくずしてしまい、ジーンズは泥でべったりと汚れてしまった――ああ、お母さんに叱られちゃう、と妙に冷静に思ったが、すぐにそれは怒りに変わった。

「誰 !?」

勢い良く起き上がり、突き飛ばした主を怒鳴りつけた。

そこには、同じクラスの葉柴芽路が今にも泣き出しそうな顔で、唇を噛み締めながらエルシリアを睨みつけていた。

「いったいなんなの、いきなり！」

突き飛ばされたエルシリアもまた、芽路を睨みつけた。

芽路が無言で、エルシリアの足元を指さした。糾弾するように、鋭く。

そこには、土を必死に押しのけるようにして、小さな小さな双葉が芽吹いていた。

●オーガスタおばあちゃん、再び

最初の探検から一週間。

再び「古代遺跡」に挑むか否か、挑むならいつにするか、探検部のメンバーたちは話し合っていた。

学校の近くということもあって、来るだけならいつでも来られるため、天気の良い日はなんとなく「古代遺跡」近くに集まるようになった。

内部へ入ることは簡単だ。もう少し灯りを持ち込まないことには、調査もおぼつかないかもしれない。

根気強く清掃作業というアプローチを続けるエルシリアを手伝いながら話していると、急にエルシリアが立ち上がった。

「……オーガスタおばあちゃん」

ふと振り返ると、そこには老婦人が立っていた。買い物帰りらしく、大きめのトートバッグを肩にかけている。

「あらあら、覚えていてくれたの？　嬉しいわ、エルシリアちゃん。あらっ、今度はみんなでお掃除なの？　あらあらまあまあ、偉いわねぇ」

にこにこと目を細めるオーガスタは、一人ひとりの名前を尋ねていった。

「守佳くんにジズくん、ビスくんにジェシーちゃんね。ええ、オーガスタおばあちゃん、ちゃんと覚えましたよ。この間はエルシリアちゃん一人だったけど、今日は皆でやっているのね」

全員に優しく声をかけながら、オーガスタはやんわりと釘を刺す。

「でも、あんまり遅くなってはだめよ。ほら、もう暗くなってしまうし、早くお家へ帰りなさいね」

「え、えーと」

「その……」

互いに顔を見合わせるメンバーたちに、オーガスタは言った。

「くれぐれも、危ないことをしてはだめよ。皆はとっても良

い子たちだから、そんな心配はないでしょうけどね」
　結局、この日も内部へ入ることはなかった。
「あのおばあちゃん、誰？」
「さあ……？」

●冬の終わり、春の始まり

「ごめんなさいね、今、キルシ先生は検査中で……」
　金髪の看護士が、せっかく来てくれたのにね、と残念そうに告げる。
　病院の壁は無表情に白く、少女は急に悲しくなった。
「……また、来ますって、先生に言っといてください」
　少女はそう答えて、ぺこりと頭を下げた。そして、すっと踵（きびす）を返すと、何事もないような素振りを装って、すたすたと去っていく。
　花はまだ、咲かない。

登場 PC・NPC一覧

【PC】
・加藤守住
・ジェシー・ジョーンズ
・ジズ・フィロソフィア
・ビス・エバンス
・クリス・グランヤード
・エルシリア・ソラ
・葉柴芽路

【ちょっとだけ登場】
・シュリー・ジルカ
・クロワ・バティーニュ
・ニアシュタイナー・シュトライヒリング

【NPC】
・ルーチェ・ナーゾ
・オーガスタ・ジェフリーズ